新同人雑誌評

【同人雑誌募集】発行ごとに【三部】、左記の宛先までお送りください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾大学内
三田文學編集部 新同人雑誌評 係 電子書籍での応募詳細はHPへ

加藤有佳織

尾代余音「その話は犬猫を全て殺してからにしよう或いは北緯三十三度一分西経四十度二十六分を向いた軽率なパロディ」（「せる」第123号）が力作でした。語り手は「手始めに市内の犬猫を皆殺しにするところから幕を開けたいと思うが」と切り出し「解釈の自由」や小説登場人物の「人権」を滔々と論じるのですが、創作をめぐる自己言及的な議論から、語る「私／俺」の姿も浮かび上がります。大学時代は文芸部所属、卒業後は元部員と同人サークルを作り、最近の作品は令和二年に書いた「祖母の介護をしていた日々をカリカチュアライズして書いた自己満足の私小説」です。祖母は平成三十年一月末に脳梗塞に見舞われ、令和五年一月現在、多臓器不全のため余命は長くありません。祖母は彼にとって「母の命を守る同盟相手であると同時に育ての親」です。父は造船業に携わり家を離れがちであり、母は鬱病で向精神薬の副作用に悩まされたりしばしば自死を試みたりしていたためです。祖母への気持ちが、心療内科の担当医師との面談時にこぼれることもあります。この気持ちに注目しすぎるのは語り手を困らせる解釈かもしれませんが、家族を失いつつあることに対峙する語りに真っ当なやさしさが滲みます。小説は祖母を「切り売り」したようであり、執筆にかけた時間は彼女と向き合うことに使えばよかったはずで、「あらゆる意味合いで、書かない方がマシだった」と綴りながら、信用できない語り手を名乗ったり、思慕を吐露するのは33歳の男性として「グロテスクだ」と自嘲したりするのですが、この肺活量の多い語りがぷつりと途切れる結末が際立っていて、語らなくなった語り手の存在感を巧妙に残します。

魚家明子「雨とドア」（「北方文学」第87号）の語り手は高校で美術を教えながら絵を描く山浦きさこです。小学生の彼女をときどき預かってくれた母の親友の九鬼さんには、ちはる、冬馬、ゆな、という子どもたちがいて、冬馬はきさこの同級生でした。「ドアを作る人」に憧れる彼とは中学校や高校も同じで、学校では関わらずとも困ったときには寄り添ってくれました。彼女が描くのは、冬馬に影響されたのか、ずっとドアですが、大学のグループ展に来た彼に「お前以外のやつは入れなさそうなドアだな」と言われます。冬馬なら「息をするのがすごく楽なんだろう」と想像していましたが、大学を中退して営業職に就いていた彼が行方不明になります。「現実の世界から死の世界へ、ドアを開けて行ってしまったんだ」と直感した語り手は、彼の車が発見された漁港を訪れ小さな青色のドアを幻視します。開けると少年の姿をした冬馬がいて、連帯感に似たきさこへの気持ちを打ち明けます。以来、彼はきさこ

佐々木義登

吉川猛「返済」（「せる」第123号）の主人公私はマンションの住み込みの管理人になりました。しばらくして十年前に金を貸した知人から、金を返したいと連絡がきます。そして知人の娘のアキミが返済にやってくるのですが、成り行きから主人公のマンションに引っ越すことになり、アキミとの人間関係が深まります。しかしまたすぐに彼女は父親の住むマンションに引っ越すことになりました。アキミが出てゆく夜、お別れ会のようなものを催しますが、私は意識を失ってしまいます。深夜、自分が養生テープのようなもので縛られ、自室の金庫や家財道具が運び出されるのを、もうろうとする意識の中で感じ取る主人公でした。知人とアキミが強盗であったかもしれないという憶測を読者に残したまま作品は閉じられますが、小説内事実は明かされません。一人称視点ならではの「語り」の特性により、主人公が感じている感覚と、それを超えた部分で展開するストーリーが全編に漂う不穏な雰囲気を醸し出していました。独自の言語感覚を持った、一筋縄ではいかない奇妙な登場人物たちも魅力の一つでした。

谷口あさこ「蝶の行方」（「せる」第123号）の主人公は学童保育ノビッコの保育士です。通勤途中に派手な色彩の昆虫のようなファッションセンスを持った女性に出会い興味を惹かれ、彼女にアゲハというあだ名をつけます。ある日、主人公の職場で小学生の菜波が迷子になります。騒動のさなか、アゲハが菜波の叔母であることが分かり、二人は接近します。そして待ち伏せしていた彼女に強引にラブホテルに連れて行かれます。実はアゲハはデザイナーで、ホテルの内装はサイケデリックな彼女のセンスに彩られていました。主人公はアゲハに対し恋愛感情とも友情とも違う、憧れと嫌悪が入り混じった奇妙な親近感を抱くのでした。主人公が彼女に抱く関心が、洋服の柄という設定が斬新で、かつ多くの読者が共感しにくい、独りよがりだけど憎めないアゲハの人物造形が秀逸で作品世界に引き込まれました。

こるり「どーも、メンヘラです」（「樹林」Vol.695）は太宰治を彷彿とさせる女性の一人称独白体で書かれた作品です。本当の恋愛を求めるも得られず、メンタルを拗らせてゆく主人公彩菜の男性遍歴が、流ちょうな関西弁と、ボケとツッコミを駆使して語られます。その姿は時に痛ましく、痛ましさゆえの泣き笑いに満ちています。容姿に恵まれながらも、それゆえに男性から性的な対象としか見られず、才能が発揮されたはずの絵画コンテストも、容姿重視で入選していたことが発覚します。人としての本質を誰も見てはくれないことを悟った彩菜が、自殺を遂行しようと

加藤評

から離れません。「入れなさそうなドア」を描いてきた彼女は、彼やちはる、そして自分を自由にするため、少し開いたドアの絵を描くのです。開けられたり閉ざされたりするドアのモチーフが丁寧に展開され、引き込まれます。

いつかのどこかへ戻ることができるならどうするかがテーマのアンソロジー「もし今、○○に戻れたら」が充実していて、とくに印象深いのが**後藤高志「あの日カプセル」**です。息子の浩一が「四年後の未来から戻ってきてん」と言い出した20年以上前の不思議な日のことを、肝がんのため入院している真知子が夢うつつに思い出します。時を戻るために飲んだカプセルの残りは保管してありますが、傘寿を控え「もう十分なのだ」と思う彼女にはもう必要なく、娘の恵子に渡そうかと考えていました。しかし、子どもたちが小さかった頃のある日の夕暮れに戻ってやり直したくなり、いよいよ封を開けると……。その時その時奮闘して家族を守ってきた真知子の自負としあわせが描かれる、何気ないようでしっかりと磨かれた作品でした。

冬由野森「夕されば」（「珍」第3号）で語り手の加代は小学校の友だち佐和と再会します。二軒となりで彼女が引越作業をしていたのです。その家の男性と結婚した佐和は、見えない誰かと会話する「少し変わったところのある子」でした。差し入れがてら訪ねると、男性の母が育てた大量の植物を処分したところでした。姪が見つけたサボテンだけは新居へ持って行くそうで、「棘がないろう」と言ってひと鉢分けてくれます。その晩、姪はいないはずであり、サボテンには小さな棘がたくさんあることに加代は気がつきます。見えないけれどもある、あるけれども見えない。そのグネリとした感覚がおもしろいです。

一乗谷かおり「無言」（「こみゅにてい」第117号）の舞台は少子高齢化する山間の集落です。住民は定期的に会議し各種行事を続けてきましたが、長を務める英介が終わりにしようと主張して自死し、新嘗祭を最後に一切を廃止することになります。祭祀を行う詮子は、集落で仕切り役を担ってきた兼昭の娘で、東京でライターをしながら神職の資格を得たのでした。廃止を決める場にいた兼昭ではなく、妻の登紀子や詮子の視点で記述されるのが効果的で、何かを終わらせることの力学が写し取られていました。

石丸明「背中」（「樹林」Vol.695）の大雅は、高校の弓道部を辞めました。懸命に練習を重ねたものの「めちゃくちゃ上手い」怜央に及ばないと感じたからです。屈託なさそうに引き留める怜央に対する尊敬や嫉妬も、弓を引きたいと自覚するまでの揺れもよく表現されていて、目標を掲げて努力する部員たちの姿がまぶしいです。

内山秀樹「七十歳の大きな壁」（「樹林」Vol.695）は、脳腫瘍が見つかり人生を登山で終えようとする70歳の小山を描き、雪山の緊張感が鮮烈です。**三島禎子「眠れぬ夜に」**（「珍」第3号）は、寝つけなさをよく表現していました。

佐々木評

する場面で、彼女の絵の才能を絶賛する父親からの「きもい」LINEメッセージを見つけます。その言葉に涙をこぼす彩菜でした。オンラインショップで絵の具を購入し、自殺を思いとどまるラストは読者に感動をもたらすでしょう。本作の特徴は、一人の女性の数奇な半生があたかも実体験の吐露のように語られながら、主人公のエキセントリックなモノローグの外側に、語り手による精密なコンテクストが構築されている点にあります。この巧妙な語りの構造が、小説とは何かという問に対する一つの答えにさえなっているかのようです。

瀬戸みゆう「刺す」（「半月　すおうおおしま」第10＋3号）の主人公わたしは時折ライン電話で友人と思われる律子と夜中に長電話をしています。その夜も彼女から十年以上別居をする夫への不満を聞いていました。娘のナツミへの理不尽な暴言や、離婚したくても報復が恐ろしくできなかったこと、さらに瀕死の義母への酷い仕打ちに至って律子の怒りは頂点に達し、夫の胸に包丁を突き立てたと述べます。それは妄想なのですが、何度も頭の中で夫を刺し殺すことによって、許しがたい夫との生活の癒しとしていたのでした。律子が義理の母の臨終を、彼女の故郷の沖縄民謡とともに看取ったラストの場面は、深い情緒をもたらします。年配の女性二人、深夜の長電話を通して、人生の重みがじっくりと味わえる一編でした。

山本弥穂「巣守り児の行方」（「珍」第3号）主人公私は三十七歳にして実家を出て都会で暮らしていたものの、一年もせず会社を辞め、交際していた男性とも誕生日の一週間前に別れ、失意のまま実家に帰ってきています。その私の部屋の戸袋に鳥が巣をつくり雛をかえしているようです。雛鳥の鳴き声や羽音から気配を感じ、子を産み育てるという一連の命の営みと、自らの人生を対比させる主人公でした。やがて雛が巣立ち、清掃員によって戸袋の巣が片づけられ、鳥の家族が過ごしていた面影はなくなります。鳥の営みを身近に感じることで、また改めてこれからの暮らしに希望を持とうとします。主人公のままならない人生と、鳥の子育てをシンクロさせる点に個性を感じました。

後藤高志「あの日カプセル」（「もし今、○○に戻れたら」）はよくあるSFのタイムリープものと見えて、ほんの少しの工夫で新鮮な感慨を読者に届けることができた作品です。主人公が薬を使って過去に戻ろうとしますが、実はすでに一度戻っていたというラストは意外でした。人生がリセットされたタイミングが主人公も読者も分からずじまいという設定が独特の余韻を残しました。

それ以外では、**内山秀樹「七十歳の大きな壁」**（「樹林」Vol.695）、**春木静哉「松杭」**（「こみゅにてい」第117号）、**水無月うらら「やわらかな鯨」**（「星座盤」Vol.17）を興味深く読みました。